

# 河野房男先生の御霊に捧げる言葉

賀 川 光 夫

すこし欲張りだが、「別府大学史学研究会」を我が国の歴史研究の舞台で評価されるような高度なものにしようではないか。別府大学史学研究会発足にあたって、こんな会話を河野房男、今永清二、後藤重巳の先生達と話し合った。理想は高いが、確かに欲張った話であった。このようにして希望に燃えて発刊したのが『史学論叢』の出版であった。その第一号が発刊されたのは昭和四十年一月二十五日であり、私は世界史学の中で問題を眺めたいと言う意味の創刊の辞を書いた。巻頭の記念論文は河野房男先生の「白河院政下の任内蔵頭について——特に藤原宗忠について——」であり、今永清二先生は「中国における回民商業資本に関する研究ノート——包頭回民経営皮毛店をめぐって——」と言う論文を書いた。更に学会動向として、広島大学伊東隆夫先生が「東南アジア史研究の現状」を寄稿され、第一号を飾ってくれた。

河野房男先生の論文は、資料の集積、その読解力において抜群の能力を発揮され、白河院政下に於ける内蔵頭について考証し、藤原宗忠を描き出していた。講読は難解であるが問題に就いての資料は可能な限り網羅されており、全体が資料の綴りと言ってよいほど充実した内容で学術的価値の高いものであった。この論文を皮きりに先生は秀れた論文を次々に『史学論叢』に寄稿され、すこし欲張った理想の表現に情熱を燃やされた。このように『史学論叢』は巻を重ね、ここに二十二号（四十六、四十七年は大学紛争のため出版中止）を出版することになったが、本号は平成

三年一月七日に永眠された先生の御命日にあわせて御霊に捧げる論集となつてしまった。

河野先生は昭和三十八年三月史学科の草創期から日本古代史を担当、主に「平安後期の政治と社会」を講義された。史実の解明には十分に吟味された資料によつて研究を進めるといった史学研究の本道を説き続けた先生の研究態度はごく当然の事のようにあるが、実行にあつてはなみ大抵のものではない。このように先生は厳しい史学研究法を残されたが、この資料選択に厳しい先生の研究態度が史学科の底流にあるかぎり、「別府大学史学研究会」創設期の「すこし欲張つた理想」は次の世代に継承されることになると思つて止まない。ここに先生の一周忌にあたり、心から御冥福を祈り、『史学論叢』二十二号を先生の御霊に捧げる。